青木次郎九郎【九八】　名は安清、安長の子。寶永六年四月御勘定となり、十三年七月組頭に進み、寛保三年六月代官職となる。延享三年七月美濃郡代に移り、寶暦四年九月遺跡を嗣ぐ。八年十月金森氏領農民一揆取扱の事により、小普請に貶して逼塞せしめられ、九年三月免さる。明和三年八月致仕し、十一月死。年八十一。法名松山。【三】

安康天皇　允恭天皇第二皇子、御母は忍坂大中姫、穴穂皇子と稱す。始め允恭天皇の崩じ給ふや皇太子木梨輕皇子淫縱殘虐なるを以て群臣之に從はず、遂に穴穂皇子を立つ。都を大和石上に遷して穴穂宮といふ。元年皇叔大草香皇子を殺し、其妃中帶姫を納れて皇后とす。三年八月大草香皇子の遺子眉輪王の爲に弑さる。御壽五十六。大和添下郡菅原伏見陵に葬る。【八二】

安德天皇　御諱は言仁、高倉天皇第一の皇子、御母は建禮門院平德子。治承二年十二月平重盛の六波羅邸に生る。四年正月父帝の禪を受け四月卽位す。六月平清盛の奏により都を福原に移し十一月舊都に復す。後平家一門に奉ぜられ西狩して文治元年四月長門壇の浦にて崩御し給ふ。時に御壽八歲。【八二】

池田一心齋イ、井　初名敏政、新十郎と稱す。備前岡山藩主宗政の子。寛政三年生る。明和元年五月遺領を嗣ぎ、九月元服して將軍諱字を賜はり治政と改む。從四位下侍從に叙任し內藏頭と改む。寛政二年十一月少將に進む。六年三月致仕す。子齊政嗣ぐ。【四】

石田三成　藤左衞門正繼の子。小字は佐吉、十歲の頃始めて秀吉に江州長濱城に從ふ。長ずるに及び潤達敏捷、秀吉に寵幸せられ每戰扈從し功あり。天正十二年治部少輔從五位下に叙し、五奉行の一人となる。十五年堺奉行をかれ海外の文化を輸入し、ついで檢地奉行となり、豐臣氏の財政を獘理し、民政を整へたり。文祿征韓役軍監となる。慶長五年德川家康と戰ひ敗死す。【二】

伊集院十藏　名は久東、伊集院久富の孫。島津氏に仕へて大目附となる。寶暦美濃治水工事の副奉行となり、四年正月鹿兒島を發し閏二月美濃に著し、工竣つて後五年五月廿六日美濃を發し江戸に上り六月藩邸に著し、九月幕府に召され賞賜さる。【三】

伊集院忠棟　代々薩摩島津氏の老臣たり。天正十五年豐臣秀吉の薩摩に入るや島津氏和を乞ひ、忠棟を以て質とす。忠棟之より豐臣氏に結納し、石田三成によりて莊內の地を求め八萬餘石を與へらる。是より强借度なく遂に畔逆を謀り、慶長四年三月九日藩主家久の邸に召され殺さる。【二】

伊勢貞丈　吉宗時代揚出。【八八】

伊地知新太夫　名は季周、島津重年に仕へて近習役となる。寶暦美濃治水の際諏訪蓋兵衞等と江戸より之に會し功あり。【三】

一色周防守　名は政沈。義政の子。正德二年六月家を繼ぎ、五年十一月御納戸に列し、累進して寛延元年七月小普請奉行と

なり、十二月從五位下周防守となる。寶暦元年三月御作事奉行に轉じ、小普請奉行を兼ぬ。二年十二月御勘定奉行に進み三百石を加增せられ、上總天羽郡内にて六百石を知行す。三年十二月濃尾勢三國治水の總監督となる。明治元年三月朝鮮信使來聘の事を奉りしにより賞せらる。二年二月留守居となり、常陸信太郡の内にて三百石を加へられ總て九百石となる。七年三月死。年八十一。【三】

伊藤坦庵

名は宗恕、字は元務、坦庵は其號なり。又自雲散人、不機齋、自怡堂等と號す。京都の人。父祖の業を受けて醫となり、江村專齋、曲直瀨玄理に學ぶ。又儒を那波活所に受く。寛文中業を改めて儒となり、專ら程朱の學を唱へ越前公に仕ふ。然れども尚京都にあり。後譴に遭ひ越前に幽せらるゝこと三年、許されて京に歸り文學の職を奉ずる故の如し。村上友佺、伊藤仁齋等と交り遊ぶ。寶永五年八月廿四日死。年八十六。著書坦庵遺稿、老人雜話あり。【四三】

ウ　鵜飼眞恭

字は子雅、稱齋と號す。通稱は權平。石齋の子、錄齋の弟なり。平安の人。少にして學を兄に受け敢へて他師に就かず。長じて後才學父兄に讓らず、博洽を以て聞ゆ。年三十二、水戸義公に知られ徵聘せらる。幾もなくして史館編修の事を預る。其學洛閩を主とすれども敢へて之に拘泥せず、尤も史學に通ず。史館にある三十七年、享保五年八月死。年六十九。江戸駒込龍光寺に葬る。著書稱齋竹馬鈔、

華夷通信錄、雜肋集あり。【八〇】

上杉景勝

字は喜平次。長尾政景の子。謙信の養子となる。常に軍に謙信に從ふ。始め謙信より其領國の半ば越後越中を與へられしが、後景虎を殺し佐渡能登兩國を併せ織田氏の將佐久間信盛、柴田勝家と戰ふ。信長死後京都に上り秀吉に謁し、從四位下左近衛權少將兼彈正大弼となる。ついで參議正四位下となる。天正十八年小田原役に從ひ、文祿朝鮮役那古耶に從ふ。同三年從三位權中納言となる。慶長二年六月大老に列し、翌年正月會津に封ぜられ百二十萬石を食む。同庚子の役後德川氏に歸屬し封を移されて米澤三十萬石を食む。元和九年三月死。年六十九。【二】

上杉治憲

田沼時代掲出。【一】

エ、エ　海老原清熙

薩藩士中村兼高の子。通稱宗之丞、雍齋と號す。六歲海老原清胤に養はれて其嗣となる。十二歲の時清胤死し家を嗣ぎ、十三四歲の頃より好んで軍書を讀み、又經濟書を學び、藏役に從事すること十年、後祿二百石を賜ふ。天保七年夏調所笑左衛門に大坂に從ひ同年冬より江戸にありて調所の下役となり漸次機密に參與す。天保十三年農政は多く清熙の建言にかゝる。又軍政の更改に與りて功あり、明治某年死。【三三、三四、三五、三七】

海老原爲與

薩藩藩士なり。柔術を傳へて藩主繼豐の師範を勤む。明和二年十一月六日死。降乘院宗運居士と謚す。子孫世々其業を嗣ぐ。【一二】

應神天皇　オヽヲ

御諱譽田皇子、また大鞆別命、胎中天皇とも稱し奉る。仲哀天皇第四皇子。母は神功皇后なり。仲哀帝の九年十二月筑紫に生る。天皇崩じて皇子未だ幼なるを以て神功皇后政を攝し立てゝ皇太子となす。皇后崩ずるに及び、年七十一にして初めて即位す。當時韓土より機織女、百工技藝の士の來るもの多く文學の士また多く來朝して我が國文化一時に開かる。四十一年二月崩ず。壽百十一。河内惠我藍伏崗陵に葬る。後元明天皇の御代豐前宇佐に奉祀し八幡大神宮と稱し奉り、清和天皇また山城男山石清水に奉祀し奉る。【一〇一】

奥平昌高

實は鳥津重豪の二男。安永四年生る。富之進、また九八郎と稱す。天明六年八月奥平昌男の養子となり其女を妻とし、九月遺領を嗣ぎ、豐前、筑前、備後三國の内に於て十萬石を領し、豐前中津城に居る。寛政六年十二月從五位下大膳大夫となる。文化七年十二月從四位下に陞る。同十四年三月溜間詰に準じ、四月侍從に任ぜらる。文政八年五月致仕し、左衛門尉と改む。安政二年六月十日死。年七十五。【二八、二九】

小倉尚齋

名は貞、字は實操、幼時山田原欽に學び後伊藤坦庵に師事す。性廉介公正、生徒を導くに法あり。防長の文學は實に源を尚齋に發す。元文二年六十歳にして死す。【四三】

小澤含章

字は公平、山東と號し多仲と稱す。父は豐久、同族永隆の後を嗣ぐ。常陸太田村の著姓なり。長じて彰考館に入り修撰の事に關與す。性博古多識凡百の技藝に熟達し最も詩及び書を善くす。寛政九年七月死。年四十四。【九三】

織田信長

小字吉法師、三郎と稱す。備後守信秀の第二子。天文三年五月尾張古渡城に生る。累遷して正二位右大臣となり、安土城に居る。天正十年六月二日逆臣明智光秀の爲に弑せらる。時に年四十九。後太政大臣從一位を贈らる。【一】

小野篁

參議岑守の子。弘仁中岑守陸奥守となるや、父に任に從ひ兵馬を習ふ。後京都に歸り、學に志し弘仁十三年文章生の試に應じて登第す。天長九年累進して從五位太宰少貳となる。十年三月東宮學士弾正少弼となり、清原夏野と令義解を撰す。承和元年遣唐副使となり發船して興に遭ひ歸る。四年再び赴かんとし事を以て罷められ隱岐に流さる。後宥され召還され本位に復す。累遷して正四位下近江守となり明年左大辨となる。仁壽二年十二月死。年五十一。【九〇】

大江廣元

大江匡房の曾孫惟光の子。幼にして中原廣秀に養はれ、後ち本姓に復す。源頼朝の兵を起すや往て隨ふ。壽永中公文所別當となる。文治元年十一月建策して諸國に守護地頭を置く。建久元年政所別當となり、累遷して明法博士、左衛門大尉、檢非違使となる。三年官を辭し、復兵庫頭となる。頼朝死後尼將軍政子に重視せられ、比企能員、和田義盛等の誅滅皆其策に與る。承久の役また鎌倉にありて北條氏の爲に籌策獻替するとこ

大井廣貞　ろあり。嘉祿元年六月死。年七十八。或はいふ、八十三。【七八】

初め彦助。後助右衞門と稱す。京都の人。伊藤仁齋の門人なり。水戸侯に仕ふ。初め召さるゝ時學の異なるを以て之を拒む人あり。されど義公別に見る所あり擧げて用ひ遂に史館總裁とす。然れども廣貞常に武事を習ひ文事を事とせず。人の諫むるあれど遂に用ひず。後綱條に代りて日本史紀傳の序を草す。人皆其文の拙なるを思ひしが其成るや堂々の文館中皆驚愕せりといふ。【八二】

大鹽平八郎　幕府分解接近時代掲出。【三六】

大竹親從　世々水戸藩に仕ふ。字は子虛、雲夢と號し、與五兵衞と稱す。幼にして菊池景英に從ひ學ぶ。寛政五年史館に入り國史を校訂す。後教授となり、文化中再び館職に復す。人其の學の精粹なるを稱す。少より詩作に巧にして尤も古風に長ず。嘗て桃源行を作り世に稱せらる。又酒を嗜み日として醉はざるはなし。家に擔石の貯なけれども敢て意とせず。當時水戸藩文質彬々頗る觀るべきものありしといふ。【九三】

大友皇子　御名は伊賀、字は大友。天智天皇の皇長子。御母は伊賀采女宅子娘。天智天皇の十年太政大臣に拜す。始め天皇同母弟大海人を太子とす。後疾あるや大海人を召し後事を托す。大海人辭して吉野に入る。仍つて大友皇子を立てゝ太子とす。この年天皇崩じ太子即位す。弘文天皇是なり。天皇即位二年山陵を修せんが爲と稱し兵を濃尾に召す。大海人これを聞き兵を起して不破郡に入る。後潰多に戰つて天皇利あらず山前に逃れ遂に自殺す。在位八月、御齡二十五。近江國滋賀郡大津長等山前陵に葬る。諡號は明治三年七月贈らる。【八三】

【カ行】

カ

桂川甫周　田沼時代掲出。【二五、二七】

川口長孺　字は曼卿、少にして父の業を繼ぎ醫となり髫髮して三省と稱し水戸侯に仕ふ。人となり豪邁にして才氣あり、又善く文を屬す。寛政中總裁立原翠軒薦めて史館に入れ侍講を兼ねしむ。後ち命じて蓄髮し助九郎と稱し權りに國史の事を總裁せしむ。一たび謁を受け、水戸に屏居せしが、數年にして再び史館に入り國史を總輯す。ついで總裁職に復し江戸に移居る。史館罷めらるゝに及び國に歸り書院番に補せられ、天保五年小納戸に轉ず。會〻病を得て死す。年六十三。著書臺灣記事、征韓偉略等あり。【九三、九八、一〇〇】

樺山權左衞門　主税に同じ。【八、九】

樺山主税　名は久言。權左衞門と稱す。薩摩鹿兒島藩士、世蔭により當番頭となる。性苛烈なりと雖、少より大志あり、よく有道に交り、行檢を勵ます。遂に久保之兄等に認められ御用人となる。時に文化三年三月年二十九なり。後漸次登用せられ藩主齊宣の信任を得、文化四年十一月には大目附より御勝手家老となり、同僚秩父伊賀と共に國政を奬理し改革するところ頗

る多し。然れども偶〻老侯重豪の忌諱に觸れ、五年九月廿六日自殺す。【七、九、一三、一五、一七、一八、一九、二〇、二三、二四】

棒山久言　主税に同じ。【八、九、一〇、一二、一九】

滿生君藏　滿生君平に同じ。松平定信時代掲出【九一】

キ

北島雅后　名は親房、村上源氏師重の子。永仁延慶の間累進して從四位に叙し、右近衛中將左中辨を經て參議に任じ、元應元年中納言に遷り正二位に叙す。元亨三年また大納言に陞り世良親王の傅となる。元德二年親王の薨ずるや痛悼して剃髮す。建武中興の業の成るや、再び出でて仕へ從一位に叙し准大臣となる。足利尊氏反するや義良親王を輔け奥羽を鎭せんとし、海上國に遭ひ常陸に入り義徒を集め足利氏と戰ひ後吉野に還る。正平九年賀名生に薨ず。著書神皇正統記、職原鈔、元々集、二十一社記等あり。【一〇一】

ク

久世丹後守　久世廣民に同じ。田沼時代掲出。【二六、二七】

朽木昌綱　田沼時代掲出。【二六、二七、二八】

久保仲通　松平定信時代掲出。【八八】

栗田寛　幼名八十吉、後利三郎と改め、又今の名に改む。天保六年九月常陸水戸に生る。父は雅文、家世〻油商たり。やゝ長じて石河幹修に從ひ經書歴史を學び、又藤田會澤等の講義を聽く。後豐田松岡に從ひ史館に入る。慶應三年三十三歳にして彰考館物書役となる。尋で水戸藩家扶となり國史編修の事を掌らしめらる。明治四年弘道館訓導となり更に彰考館編修となる。五年茨城縣出仕となり又平野神社少宮司兼大講義となり六年出でゝ大教院教部省に出仕し、十年修史館に勤む。二年にして歸り十七年更に元老院准奏任御用掛となり、二十二年辭して歸り二十五年文科大學教授となり、三十二年一月死。年六十五。死に臨み從四位に叙せられ文學博士を授けらる。著書數種皆世に行はる。【八三、一〇一】

栗山愿　通稱源助、字は伯立、一名成信、潛鋒と號す。山城淀の人。本姓長澤氏。少にして京都に遊び桑名松雲に學ぶ。後栗山氏に改む。鵜飼眞昌に薦められ、彈正尹八條親王の伴讀となり爲に保建大記を著し進む。明年親王薨ずるや都下に隱れて潛鋒と號す。後水戸義公に召されて儒臣となり三百石を賜はる。時に年二十三。ついで彰考館總裁となる。安積覺、三宅緝明の諸詩人と同じく詩文に於ける技巧を好まず。寧ろ小巧ならんより大拙ならんを欲すといへり。寶永三年四月江都に死す。年三十六。【二〇】

コ

栗山潛鋒　愿に同じ。【八五】

小池友識　通稱源太衛門、世〻水戸藩に仕ふ。組父友賢史館總裁となり、父友貞馬廻組となる。母は小池氏なり。長じて書院番となり、又史館編修を兼ぬ。性温厚にして和歌を善くし又武藝に通ず。和歌は卽ち日野大納言資枝に

學び、よく其奥秘を傳へられ、武術は最も東軍田宮の刀と寶藏の槍とに精し。文政八年二月死。年七十三。水戸筑川村妙雲寺に葬る。【九三】

後小松天皇

松平定信時代揭出。【八五、一〇一】御名は幸仁。後朱雀天皇第二子。御母は陽明門院禎子内親王。長元七年七月春宮亮源行任の第に於て御降誕、同九年十二月親王宣下、寛德二年正月皇太弟となり、治暦四年四月後冷泉天皇崩御に及びて踐祚し、七月卽位し給ふ。御年三十五。當時權貴のもの多くの莊園を占め國衙の政治頽廢せるを以て記錄所を設けて其弊を矯め、又量制を明かにし所謂延久宣旨枡を作る等治績頗る多し。延久四年十二月位を皇太子貞仁親王に讓る。在位四年、改元するもの一。翌五年五月七日崩ず。御壽四十。山城國葛野郡花園村谷口圓宗寺陵に葬る。【八二】

後三條天皇

其熙の子。吾樂軒、虛舟子等と號す。母は當子内親王、官左大臣、攝政關白に至り太政大臣に進む。享保十年詔して三宮に准ず。尋で薨ず。法名貞覺。元文元年十月薨ず。年七十。豫樂院と號す。性書を好み意外の貨を得ることあれば一緡錢といふと雖、必ず書を購ふの料に充つ。故に歷年購ふ所積んで大部に至り又珍籍多し。而して之を讀むに當り疑字に遇へば博く群書を索搜して考證訂正すといふ。憲子内親王に尙し子家久を生む。【八三、八四】

近衛家熙

松平定信時代揭出。【八五】幼字德壽丸、通稱又四郎、毛利元就の第三子。小早川正平の後を嗣ぐ。兄吉川元春と父を助けて東西を經營し、父の死後甥輝元を輔佐す。後秀吉と和し、伊豫三十五万石を賜ひ、更に轉じて筑前及び肥前筑後二郡を食み、三原城を築きて居る。仍つて三原中納言といふ。十九年秀吉の甥秀秋を養ひて嗣となす。文祿征韓役また功あり。慶長二年六月死。年六十五。【四三】

後花園天皇

幕府分解接近時代揭出。【四三】

小早川隆景

水戸の人、名は昌秀、字は子實。少にして立原萬に從ひ學ぶ。文公卽位するや命じて侍讀とせらる。ついで擢でられて郡宰となる。卽ち家を其管治楓村に移し勸農を以て意となし、別に小室を設け燕居讀書し楓軒と號す。嘗つて瘠土に槲樹を植ゑしめよく其功を修め、曠原變じて鬱林となり頗る公の賞を得たり。治にある二十年老齡を以て職を辭す。尋で留守に任じ、後市尹となり又側用人に至る。死する時年七十七。著書數多あり。垂統大記尤も著はる。【八九、九二、九三、九四、九六、九八、一〇二】

水戸尾上皇

小宮山楓軒

【サ行】

サ

嵯峨天皇

御名は神野、桓武天皇第二皇子、御母は贈太皇太后藤原乙牟漏、延曆五年九月御降誕、大同元年五月皇太弟となり、同四年四月十三日卽位、在位十四年、弘仁十四年四月皇太弟大伴に位を讓る改元するもの一、承和九年七月崩ず。御壽五十七。山城上嵯峨嵯峨山上陵に葬る。遺制に依て山陵國忌を置かず。天皇幼より聰明に

坂本天山

おはしまし、好んで書を讀み、長ずるに及び博く經史に通じ、詩文を善くし書法に巧なり。世に橘逸勢等と共に三筆と稱せらる。【八三】

信州高遠の人。名は俊豈字は伯壽、天山は其號なり。元近江坂本邑の出、父英俊に至り高遠侯に仕ふ。天山幼にして岐嶷、學を好む。明和四年父の後を嗣ぎ翌五年暇を乞ひ浪華に遊び、荻野氏に就き砲術を習ふ。然れども意に滿たず遂に刻苦して所謂周發の術銃陣の節を創案す。歸つて諸生に教授す。來り學ぶもの頗る多し。嘗つて郡宰となり士民の舊弊を釐革せんとし、却つて讒搗にあひ禁錮せらるゝもの三年、後赦され寛政十年西國に遊び縉紳の間に講說し遂に平戸侯に聽せられ其子弟を教授するに至る。享和三年二月平戸に死す。年五十九。著書兵律論、銃陣詳說、火砲說、天山遺稿等數種あり。世に其砲術の流を天山流と稱す。【四四】

撒美惠師

西班牙の貴族、千五百六年生る。同四十一年葡萄牙の里斯本を發し四十九年日本に來りて布教に從事す。後去りて千五百五十三年澳門の南蠻セントジョンス島に死す。時に年四十七。【二七】

シ

柴野栗山

島津重年

柴栗山に同じ。田沼時代揚出。【八八】

繼豐の二男、享保十四年鹿兒島に生る。始め家臣久季が養子となり、寛延二年宗信が嗣となる。十一月遺領を繼ぎ、將軍諱字を賜はり、從四位下少將に叙任し薩摩守と稱す。寶曆二年琉球謝恩使今歸仁王子を携へて登營し、五年六月美濃尾張伊勢三國治水の工を助けし功により時服を賜はる。この月十六日死。年二十七。覺滿良義圓德院と號す。【四、五、一二】

島津重豪

初名久方又忠洪、南山と號す。通稱善次郎、又又三郎。延享二年十一月鹿兒島に生る。父は久德、後本藩重年の嗣となり寶曆五年七月家督を襲ひ、八年六月將軍諱字を賜はり今の名に改め從四位上中將となる。天明七年正月家を子齊宣に讓りて隱居し上總介となる。寛政四年江戸高輪の別墅に退きしが後また藩政を視、薩藩財政を釐革すること多し。其女將軍家齊及び松平越中守に嫁せるを以て諸侯に畏敬せられたり。後三位に叙し、寛政十二年總髮となりて榮翁と稱す。天保四年正月死。年八十九。【四、五、六、七、一二、一六、一八、一九、二〇、二一、二四、二七、二八、二九、三〇、三二、三五】

島津繼豐

島津吉貴の子。元祿十四年生る。正德四年元服して將軍諱字を賜ひ、從四位下侍從に叙任し大隅守と稱す。享保六年六月襲封。十二月少將に進む。十四年十二月從四位上中將に昇進し、延享三年十一月致仕す。寶曆五年重年死し重豪なほ幼なるにより國政を攝すべき旨命ぜらる。十年九月鹿兒島に死す。年六十。圓鑑享盈宥邦院と號す【四】

島津齊彬

齊興の子。幼字邦丸、文化六年九月江戸邸に生る。世子たる時より心を國政に用ひ英名夙に著はる。嘉永四年二月封を襲ひ薩摩守と稱し、次で

左近衛中將に任ず。國政に涖むや恩威並濟り質實勤儉を守り、奢侈を禁じ、文武を興し大に洋學を採用して人材を養成す。外警頻りに起るに及び、海軍を起し又家臣を上國に出して國事に奔走せしむること多し。安政五年七月病に罹りて死す。年五十。謚して順聖といふ。文久三年祠を鹿兒島に建て照國神社と稱す。明治十五年陞せて別格官幣社とす。【四、二九、三六、三七】

島津齊宣

重豪の子。明和六年生る。初名忠亮天明六年十二月元服して將軍諱字を賜はり、從四位下侍從に叙任し豐後守と稱す。七年正月封を襲ふ。寛政二年十一月從四位上中將に進む。同八年十二月琉球の使者大宜見王子を具して登營す。文化六年六月隱居して封を子齊興に讓る。【五、六、七、八、九、一〇、一八、一九、二一、二四、三〇、三五】

島津宗信

繼豐の長男。享保十三年生る。元文四年十二月元服して將軍諱字を賜はり、從四位下侍從に叙任し、薩摩守と稱す。延享三年十二月少將に進み、寛延元年十二月從四位上中將となる。ついで琉球國使具志川王子を携へ登營す。二年七月鹿兒島に死す。年二十二。俊嚴良英慈穆院と號す。【四、一二】

島津義久

貴久の長子、永祿七年三月正五位下に叙し修理大夫となる。往年伊東氏に奪はれたる地を復し、また大隅日向二國を併せ勢强大となる。天正七年從四位下に陞り、十三年薩摩守護職を弟義弘に讓り、倚兵を出して北九州を征し大友氏を亡す。十五年豐臣秀吉と戰ひ敗れしが、なほ薩隅二國を安堵せらる。後大坂に至り秀吉に謁し十六年在京料一萬石を賜ひ三位法印に叙せらる。關原役西軍に屬せしが依然本領を安堵す。慶長十六年正月死。年七十九。【二】

淳和天皇

御名大伴。桓武天皇第三の皇子。御母は藤原百川の女旅子。延曆五年丙寅誕生。兵部卿、治部卿、中務卿等を歷任して弘仁元年九月嵯峨天皇の皇太弟となり、同十四年四月卽位す。最も詩書を善くし給ふ。在位十年位を皇太子仁明天皇に讓り西院に移らる。承和七年崩ず。御壽五十五。改元するもの一、山城大原野西嶺上陵に葬る。【八二】

稱光天皇

御諱實仁、後小松天皇第一の皇子。應永八年三月降誕。十八年親王となり、二十一年十一月後小松上皇の禪を受けて卽位す。上皇倚政を攝す。天皇佛法を信じ給ひ常齋して嗣なし。後位を弟後花園天皇に讓る。在位十六年。正長元年七月崩ず。御壽廿八。山城深草法華堂陵に葬る。【八五】

白川源侯

松平定信に同じ。松平定信時代、幕府分解接近時代揭出。【九〇】

白尾國柱

幕府分解接近時代揭出。【六】

申維翰

吉宗時代揭出。【二】

神功皇后

仲哀天皇の后なり。御名息氣長足姬、開化天皇五世の孫、息氣長足宿禰王の女。幼にして聰叡容貌壯麗なり。仲哀天皇二年正月立つて皇后となる。天皇崩御するに及び後事を督し、威を海外に示し皇威大に張る。應仁天皇生るるに及び朝に臨み制を稱

新見又四郎

す。群臣草みて皇太后といふ。都を大和十市郡磐余に遷し稚櫻宮に居る。攝政七十年己丑崩御。御年百。狹城盾列池上陵に葬る。後神功皇后と謚せらる。【八三】

名は正榮、新見正員が六男。正庸の養子となる。享保十九年六月遺跡を嗣ぎ、元文四年六月御書院番士となる。寛保元年六月より進物の事を役す。寶暦四年正月廿九日目付に代りて美濃尾張伊勢三國に赴き、川々の普請を巡視し、五年八月御徒の頭に轉ず。七年七月目付に移る。十一年九月小普請奉行となり、十二月從五位下加賀守となる。明和二年正月長崎奉行に轉じ、安永三年十一月御作事奉行に移る。四年十一月御勘定奉行に進む。五年九月死。年五十九。【三】

神武天皇

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四御子。御母玉依姫、海童の小女なり。天皇生れながらにして明達、意確如たり。年十五にして立つて皇太子となり、日向國吾田邑吾平津媛を納れて妃となし手研耳命を生み給ふ。御年四十五、諸皇兄と共に日向を立ち東征して遂に天下を撥平し、八洲を奄有し給ふ。故にまた號を加へて神日本磐余彦尊と申す。大和畝傍山の東南橿原の地に都を奠め、辛酉年春正月帝位に即き給ふ。七十六年春三月十一日橿原宮に崩ず。御年百二十七。明年秋九月畝傍山東北陵に葬る。【八二、一〇一】

朱雀天皇

御名寛明、醍醐天皇第十一皇子、御母は藤原基經の女穩子。延長元年七月降誕、同三年十月醍醐天皇の太子となり、同八年九月禪を受けて踐祚し、十一月即位す。時に政綱漸く弛み、地方には群盜大に起りて行旅、或は公私海船の掠奪せらるゝもの多く、遂に純友將門の亂を惹起するに至れり。亂平ぎて後天慶九年四月天皇位を村上天皇に讓り朱雀院に移り給ふ。天暦六年三月薨奚、四月仁和寺の本院に移り八月十五日崩御。御壽三十。在位十六年、改元するもの二。山城宇治郡醍醐陵に葬る。【八二】

宇は子答、白泉また竹苞と號す。其祖は武州松山城主上田氏の臣、勇武を以て水戸侯に仕ふ。白泉幼にして學を好み、安積澹泊に從學し、史館生員となり、學稍進み遂に編修總裁となる。官班持弓頭に至り祿百五十

鈴木白泉

曾祐

石を增し二百石に至る。朝鮮使臣と吟詠唱和す。性寛厚にして人と爭はず、家人子弟に接する極めて溫雅なり。常に客をひきて往來談笑殆ど閑日なし。寛政五年正月歿す。年七十七。【八八】

曾槃

重祐と同じ。【九四】

通稱占春、字は士考、また煥卿と稱す。昌啓また槃と名づく。祖彥は明の人、歸化して長崎に居り醫を業とす。子孫是より其業を承け兼て通事たり。槃の父昌啓庄內侯に仕へしが、槃に至り仕を辭し徒を率めて教授す。島津重豪の成形圖說を編するや聘せられて其編纂總裁となる。天明中幕府の醫官藥品會を創め審定官を置き物品を勘定するの事あるや藩命

を奉じて其事に副となる。以後年々以て常となす。著書本草綱目纂疏、藥圃桔餘府志、國史草木昆蟲考、水草志略、皇和算譜等あり。【五、六】

【タ行】

泰　桓公

名は吉元、毛利甲斐守綱元の長子。延寶五年生る。元祿四年十二月從五位下右京大夫に叙任し、寶永三年十二月將軍諱字を賜はり、吉元と名のる。四年宗家毛利吉廣の嗣となり、同年十一月遺領を嗣ぐ。ついで侍從に任じ民部大夫に改む。享保九年八月長門守に改め、十六年九月死。年五十五。仰岳淨高泰桓院と號す。萩東光寺に葬る。【四一】

醍醐天皇

御名敦仁、宇多天皇の長子、御母は藤原高藤の女胤子。仁和元年正月降誕、寛平元年十二月親王となり、同五年四月太子となる。九年七月受禪卽位。藤原時平、菅原道眞左右大臣たり。後道眞事を以て貶せらる。延喜元年三代實錄を撰せしめ、同五年和今和歌集を撰せしむ。尋いでまた延喜格式六十二卷を撰せしむ。延長八年九月廿二日位を朱雀天皇に讓りて落飾し卽日崩御。御壽四十六。在位三十三年。改元するもの三。山城國醍醐村後山科陵に葬る。【八二】

高木玄蕃

名は貞明、美濃交代寄合衆なり。代々石津郡多羅鄉に居る。貞明は寶曆三年十一月父允貞の遺跡を嗣ぎ、五年十一月多羅に死す。年二十。法名芳林。【三】

高木內膳

名は貞往、玄蕃貞明と同じく美濃交代寄合衆にして代々多羅に居る。貞明と同家なり。貞往實は山本八右衞門邑旨が五男にして貞隆の嗣となり、享保元年八月其後を嗣ぐ。安永二年多羅に於て死す。年七十二。【三】

高倉天皇

御名は憲仁、後白河天皇第七の皇子。御母は平時信の女建春門院滋子。永萬元年十二月立親王、仁安元年十月六條天皇の皇太子となり、三年二月受禪、三月卽位す。後白河法皇院中にありて政を聽くこと舊の如し。この時に當り平清盛横暴を極め事を以て法皇を幽し奉る。天皇大に之を憂ひ給ひ、且皇權振はざるを慨し、治承四年二月位を清盛の女德子の生むところの安德天皇に讓る。幾もなくして疾を得、養和元年正月平頼盛の六波羅邸に崩ず。壽廿一。京都清閑寺町の後清閑寺陵に葬る。【八二】

高島四郎太夫

名は茂敦、字は子厚、また舜臣、秋帆と號す。寛政十年長崎に生る。其家代々長崎町年寄に任じ、長崎御鐵砲方を兼ね、長崎奉行直轄の砲臺を掌り、且つ唐國貿易を管理し苗字帶刀を許さる。秋帆長じて父の職を嗣ぎ、海防の事につき砲術改良の意見を上りたれども奉行に用ひられざるを以て自費を投じて軍器を和蘭より購ひまた出島滯留の蘭人に就き砲術を學び、多くの子弟を教養せり。天保中幕府の召しに應じ江戸に至り穩丸原にて新砲術を試みしが、後讒にあひ牢獄に投ぜらる。十年を經て赦されしが、末路甚だ振はず。慶應二年正月死す。年六十九。江戸駒込東片町大圓寺に葬る。【七四、七五】

藍司政熙

高橋作左衛門

松平定信時代揭出。【九九、一〇〇】名は至時、字は子春、東岡又梅軒と號す。大阪の御定番同心元亮の子なり。明和元年十一月生る。寛政七年父の職を嗣ぐ。性曆學を好み麻田剛立に就て天文を學ぶ。西洋の書を參取して舊曆の誤りを正し之を幕府に上る。同年卒伍に擢んでられて曆官となり、源秀升、平德風等と消長法を立て新曆を成す。所謂る寛政曆なり。文化元年正月死。年四十一。江戸下谷源空寺に葬る。著書曆說二十餘卷あり、家に藏す。【二七】

高橋廣備

字は至大、又衛門と稱し坦室と號す。世々水戸藩に仕ふ。廣備少にして業を長久保赤水に學ぶ。俊敏藤田一正と並び稱せらる。遂に史館に入り館生に補せられ侍讀となり總裁の事を

掌せしめらる。數年頗る文公に書を進せられ、後翠軒と事を議するに及び論頗る合はず遂に外補を乞ひ出でゝ右筆となる。文公國史を改訂するに及び渡邊崋を以て提擧となす。是に於て再び官に入り、專ら紀傳訂正の事を掌る。武公の時中書吏となり渡邊崋と政治に參與し時弊を改め治績頗る觀るべきあり。然れども小人に沮まれ後遂に仕を辭して去る。【九二、九三、九四、九五、九七、九九、一〇〇】

高山仲繩

高山彦九郎に同じ。田沼時代、松平定信時代揭出。【九一】

瀧鶴臺

名は長愷、彌八と稱す。鶴臺は其號なり。もと引頭氏、醫瀧奚正に業はる。幼にして學を好み、初め小倉尙齋に學び後山縣周南に從つて徂徠の學を受く。數年の後江戸に出で服部南郭の門に遊ぶ。既にして去り京に至り長崎に赴きまた江戸に來る。時に名聲大に顯はれ來り學ぶもの頗る多し。遂に毛利藩侯に召されて家臣となり、實曆癸未韓使來るや馬關に於て之に接伴す。周南死後擢でられて明倫館祭主となり、公子の侍讀を兼ぬ。肥後秋山玉山、尾張紀平洲等と交り、又醫山脇東洋、吉益東洞等と交る。安永二年正月死。年六十五。【四三、四六】

武內宿禰

孝元天皇の皇子彦太忍信命より出づ。景行天皇廿五年命を奉じて東北諸國を巡察し廿七年歸奏す。成務天皇即位するに及び棟梁の臣となさる。後仲哀天皇熊襲征討に從ひ天皇崩御に及び神功皇后と謀りて三韓を征し凱旋して麝坂押熊二皇子を討ち功あり。應神天皇の朝を經仁德天皇五十五年に至り薨ず。歷仕する景行より仁德五朝に及ぶ。壽明かならず。【七九】

多湖直

美濃の人、字は溫卿、岐陽と號す。通稱源三郎。元祿九年大井貞廣、大串元善の薦を以て水府に仕ふ。二百食を食む。正德三年二月死。【八〇】

立原杏所

字は遠卿、また子遠、杏所また東軒、玉琴舍、香案小史と號す。通稱任太郎。水戸藩士翠軒の子。父に從つて學び長じて小普請となり二百石を食み、武公哀公景山公に歷仕し小性頭に進み祿五十石を加ふ。人となり醲藹風流、氣節を尙び然諾を重んじ侈ら書畫篆刻に工みなり。殊に鑑識を善くす。塩田隨齋、卷致遠、華山、

儒匡、菊池濟雅等と友とし善し。景山公心を海防に留め水軍を練り、火技を習ほしむるに及び與つて力あり。天保十年脚疾を憂ひ仕を辭せども許されず。十一年五月江戸小石川邸に死す。年五十六。【九二】

立原翠軒

松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【八七、八八、八九、九〇、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、一〇二】

立原萬

翠軒と同じ。【九二、九三】

田沼意次

寶暦明和篇、田沼時代、松平定信時代掲出。【五、二七、八七】

田沼意知

田沼時代掲出。【二六、二七】

平清盛

忠盛の子。大治四年從五位下に叙し、左兵衛佐に任じ、久安二年正四位下に累進し、安藝守に任ぜらる。保元の亂功を以て播磨守に任じ尋で太宰大貳に叙す。平治元年源義朝と戰つて勝つ。永暦元年正三位に叙し、尋で參議に任す。永萬元年權大納言となる。仁安三年從一位太政大臣に陞り、隨身兵仗を賜ひ、輦車宮中に入るを許さる。三年剃髪して清盛と稱し尋で靜海と改む。權勢一世に張る。世に太政入道と稱す。養和元年閏二月死。【四】

玉野九華

周防岩國の人。名は惇成、字は裕甫、藩學振興に力を盡し功あり。初め物門の學を喜び、後程朱に歸す。其文章また巧妙にして風雅の趣あり。嘉永四年死す。年五十五。【四三】

田村元雄

田沼時代掲出。【五】

チ

秩父伊賀

通稱太郎、季保と名のる。島津氏の世臣たり。性剛强にして人に屈せず。

仕へて目附となり、享和二年正月大目附新納久命の旨に忤ふことあり、職を褫ひ家に錮せらる。時に年廿六。文化三年七月赦されて目附御裁許掛を命ぜらる。四年正月道寮行となる。十一月當番御用人勤となり、ついで大目附に轉じ、十二月には家老となさる。是より樺山久言等と共に藩候齊宣の信任を得て藩政改革の事に當りしが、前主重豪公の怒りに觸れ、翌五年閏六月遠島を命ぜられ、ついで七月六日自殺す。【七、八、九、一〇、一一、一二、一四、一五、一七、一八、一九、二〇、二三、二四】

チナング

5432132

和蘭の人なり。安永八年來朝して出島商館長となる。島津重豪、朽木昌綱、平賀源内、司馬江漢、大槻玄澤などの蘭學攻究を助け、また我が國に造船術を輸入せんとして邦人技工を海外に派出せんことをも企て、我が近世文明に貢獻せるところ多し。天明四年任を解て歸り、五年蘭領印度總督となり、翌年蘭清通商の交渉の爲清國に使す。後二年を經て歐羅巴に歸り、享和四年佛蘭西巴里に客死す。其著日本紀事は吉雄耕牛、松村安之丞、桂林重兵衛、堀門十郎等の助力により編述せるものなり。【二六、二七、二八】

持統天皇

御名は鸕野讃良皇女、天智天皇第二皇女、母は蘇我遠智娘。齊明天皇三年大海人皇子の妃となる。天智天皇四年十月皇子從つて吉野に入り、皇子の兵を擧ぐるに及び謀議に參與す。皇子卽位するに及び皇后となり、政を輔けしが朱鳥元年天皇崩御を以

て朝に臨み側ゐ稱すること三年、四年正月群臣の請により即位す。十一年位を文武天皇に讓り稱して太上天皇といふ。大寶二年十二月崩ず。壽五十八。大和高市郡野口檜隈大内陵に葬る。【八二】

調所笑左衛門　名は廣郷。もと川崎良八と稱す。安永五年二月生る。川崎主右衛門二男。天明八年調所清悦の養子となり友治と稱し、寛政二年表坊主となり清悦と改名、十年御隱居御附奥御茶道勤となり笑悦と改名す。文化十年笑左衛門と改む。累遷して文政五年町奉行となり、同七年御側御用人格兩御隱居樣御讀料掛となり、同八年御側御用人御側役勤となる。十一年高五十石となる。天保二年大番頭となり御役料高百八十石を給せらる。三年大目付格を經て御家老格御側詰勤となり、七年高五百石を賜はる。後更に七百石となさる。嘉永元年冬死。【三〇、三二、三三、三四、三五、三六】幕府分解接近時代掲出。【五、二七、二八】

ツンベルグ　西暦千七百四十三年十一月瑞典ヨンキョービンに生る。長じて醫學をウプサラ大學に、外科及び解剖學を巴里大學に學び、千七百七十一年和蘭東印度會社附の醫員となり、千七百七十五年長崎に來る。我が安永四年八月なり。居ること二年甲比丹に從ひ江戸に至り知見を廣むること多し。千七百七十七年セイロンを經て瑞典に歸り、千七百八十四年ウプサラ大學の植物學教授となり、日本植物譜の著あり。千八百二十八年死。年八十五。【二五、二六、二七、二八】

趙翼　字は雲崧、甌北と號す。清の江蘇陽湖の人。乾隆二十六年進士に登第し、第三人となり三品銜を加へらる。詩を以て名あり。嘉慶十九年死。年八十八。廿二史劄記、皇朝武功紀、陔餘叢考、簷曝雜記、十家詩話、甌北集等の著あり。【八一】

徳川家重　吉宗時代、寶暦明和篇、田沼時代掲出。【三、四】

徳川家綱　幼字竹千代。家光の長子。母は寶樹院、青木利長の女。寛永十八年八月江戸城本丸に生る。正保二年四月元服。從三位權大納言に任じ、四年正月家を繼ぎ、八月征夷大將軍となり、内大臣に任ず。阿部忠秋、松平信綱等を用ひて政を執らしむ。延寶八年五月死。年四十、東叡山に葬る。勅して正一位太政大臣を贈らる。【一七】

徳川家齊　松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【四、五、六、三〇、五〇、五三、八七、一〇三】

徳川家治　寶暦明和篇、田沼時代掲出。【六】

徳川家光　松平定信時代掲出。【二】

徳川家康　家康時代以下各篇掲出。【二】

徳川綱條　頼重の子。兄綱方と同じく光圀に愛はれ、兄の死後其嗣となる。從五位上に叙し、采女正に任じ、封を襲ふ。參議從三位に累遷し封邑七萬石を加ふ。寶永二年權中納言に至る。享保三年死す。年六十三。謚して廉公といふ。【八〇、八二、八七、九八、一〇〇】

德川綱吉

幕府分解接近時代掲出。【九八】

德川齊昭

水戸烈公に同じ。幕府分解接近時代掲出。【七四、八〇】

德川齊修

水戸侯治紀の子なり。字は子誠、幼名は榮之允、寛永九年江戸小石川邸に生る。文化七年元服して左衛門督に任ず。明年正四位下左近衛少將に叙任す。十一年從三位權中將に進む。十三年封を襲ひ參議となる。文政八年權中納言となる。十二年十月江戸邸に死す。年三十二。私謚して哀公といふ。【一〇一、一〇三】

德川治貞

吉宗時代、田沼時代掲出。【一】

德川治紀

水戸藩七世の主なり。治保の長子、字は德民、鶴山と號す。天明中從五位下左衛門督を經、寛政八年從三位權中將に進む。ついで封を襲ひ參議に拜す。資性沈毅大度あり、文武の學に精しく、始祖以來尊王敬神の道を擴充し、大日本史補修校訂の業を奬め、遂に本紀廿六卷を板刻し朝廷に進獻するに至る。職にある十二年、文化十三年閏八月十四日死。年四十四。武公と謚す。長子齊修嗣ぎ、ついで其後を三子齊昭嗣ぐ。大正十三年二月正三位を贈らる。【九九、一〇〇、一〇一、一〇三】

德川治保

水戸宗翰の子、父の後を紹ぎ、從三位に陞り參議を經て權中納言に至る。性學を好み立原翠軒を用ひて侍讀となし、又日本史校勘の業を畢へしむ。此時代水藩文學彬々として見るべきもの一に治保の賜なり。文化二年冬死。年五十五。文公と謚す。【八七、八九、九三、九五、九六、九七、九八、一〇〇、一〇三】

德川光圀

水戸義公に同じ。松平定信時代掲出。【八〇、八二、八七、九三、九八】

德川宗睦

尾張侯宗勝の第二子。幼字は熊五郎、字は子和。享保十八年九月生る。寛保二年十二月元服を加へ將軍吉宗の諱字を賜はる。寶曆十一年八月襲封。性文武を好み、庶政を改革し、質素儉約を以て衆を率ゐ、屢々儉約の令を發し、爲に府庫充實するに至る。又明倫堂を起し細井平洲を擧げて督學とし、聖廟を建て釋典を行ひ文學を以て名あるもの輩出するに至る。殖產興業奬勵の事蹟また大に見るべきものあり。寛政十一年十二月死す。年六十七。法號を天祥院といひ、明公と謚す。【八七】

德川吉宗

吉宗時代、松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【二、六四】

德川賴重

水戸賴房の長子、母は谷重則の女。光圀と同出なり。元和八年生る。甫めて二歲、京都に送られ權大納言藤原季吉の第に長す。仍て季吉の養子となる。成童に及んで天龍寺塔頭慈濟院に入る。寛永十年家光に召されて右京大夫となり、累遷して從四位右近衛權少將となる。高松城十二萬石に封ぜられ、寛文十三年隱居して龍雲軒源英と號す。元祿八年四月死。年七十四。【八〇】

戸田氏庸

幼字金八郎、氏敎の子。安永九年生る。寛政九年十二月從五位下伊賀守となる。【九九】

富田敏貞

字は復圭、通稱平助、長洲と號す。水戸藩の儒者なり。性溫厚にして、文筆劍槍諸技皆之を善くす。少時增子淑時に從ひ學ぶ。終身其忌日には

其家に至り神主を拜せしといふ。【八八】

富田長洲　敏貞に同じ。【九四】

豐臣秀吉　家康時代以下各篇掲出。【二】

【ナ行】

ナ

中川淳菴　田沼時代掲出。【二五、二七】

長久保玄珠　赤水と同じ。【九三】

長久保赤水　幕府分解接近時代掲出。【八九、九六、九七】

中村顧言　字は伯行、篁溪また春帆と號す。通稱新八郎、京都の醫正勝の子。幼にして穎敏、寛文中父に從つて江戸に移り林鵞峰に就きて學ぶ。後また梅洞整宇に從ふ。學成るの後水戸藩に薦められ、彰考館編輯の事を總裁す。天和中韓人來聘するや使を藩邸に通じて頗る禮を失ふことあり。乃ち命を奉じて之を詰責し大に侯命に協ふ。義公歿後益重用せられ擢んでゝ小姓頭となさる。正德二年二月死。年六十六。著書篁溪文集、運珠章若干あり。【八〇】

名越克敏　初名時中、字は子聰、南溪また簡齋と號す。通稱十藏。江戸の人。林家の門に學び、名を昌平黌に知らる。性豪放にして細節に拘はらず常に擯擯を著て意となさず。人稱して葬鄭十藏といふ。享保十九年水戸侯に仕へて國史編修總裁となる。安永六年五月死。年七十六。江戸本郷善福寺に葬る。【八八】

名越南溪　克敏に同じ。【八八】

【ハ行】

ハ

馬場佐十郎　長崎の人、名は貞由、字は職夫、叡里と號す。父は敬平、母は下川氏。兄貞歴の嗣となる。夙に志筑忠雄に從つて蘭學を修め出藍の譽あり。文化元年江戸に召されて萬國全圖補訂の事に當り、同八年五月天文臺に蘭書和解御用掛の一局を設けらるゝや、擧ばれて其役員となる。後露國船將ゴローウインを捕へて松前に拘囚するや命を受けて行きて之に露語を學び、俄羅斯語小成十一卷を編して上る。文化十一年四月擢でられて小普請組となる。文政元年英船長崎に來るや、また命を奉じて該地に赴き旨を諭して去らしむ。同五年七月江戸淺草暦局の内に死す。年三十六。下谷宗延寺に葬る著書數種あり。【二七】

馬場爲八郎　幕府分解接近時代掲出。【二七】

林述齋　松平定信時代掲出。【七七、九九】

林東溟　名は義卿、字は周文、周介と稱す。長門の人山縣周南に學び、十三歳擧げられて明倫館生員となる。和智東郊、山根華陽等と長州十才子と稱せらる。特に鶴臺東郊と並び縣門三傑と稱せらる。年廿四、故ありて浪華に至り講説を以て業とし又平安に移り居る。京洛の間に其名漸く高し。實に京洛物門學の嚆矢となさる。後江戸に來りてまた諸生を教授す。晩年に及び紫碧仙叟と稱し、老莊の學を好み優游す。安永九年九月死。年七十三。著書明官古名考、文則、詩則、東溟詩稿等數種あり。【四三】

林信篤　松平定信時代掲出。【八三、八四】

林信充　信篤の子。一名を怠といひ、字は士

厚、また春蔡、榴岡と號す。寶永元年九月父の勸を見習ひ中奥御小姓の次席に候す。五年三月西城の侍講を勤む。享保八年九月從五位下大學頭となる。寶暦七年六月致仕し、八年十一月死。年七十八。著書、駟象編詩法蠡測、越後孝婦傳、越中孝子傳、本朝世說、續國史等あり。【八三、八四】

ヒ

一橋治濟　松平定信時代掲出。【五、八七】

一橋穆翁　治濟に同じ。【四】

平田靱負　名は正輔、島津重年に仕へて家老となる。寶暦中美濃治水の總奉行に擧げられ、四年正月鹿兒島を發し途中大坂にて資金の才覺をなし、美濃に著し、大牧村に居り工事を監督す。翌五年五月二十二日工事終了したれども故あり其二十五日自殺す。屍骸を伏見に運び大黒寺に葬る。高元院殿節岑了操大居士と號す。【三】

フ

藤田幽谷　幕府分解接近時代掲出。【八七、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九八、一〇二、一〇三】幽谷に同じ。【八二、九三、九四、九六、九七、九九、一〇〇】

藤田一正　田沼時代掲出。【九二、一〇二】

藤田東湖　水戸藩の年寄なり。三百石を食む。

藤井紋太夫　柳澤保明の家老藪田五郎左衞門の女婿となり。保明の藤を以て千八百石を食むに至る。爲に保明の姦計を成さしむるに盡力す。藩中の士之を疑ひ事に託して其家を搜索し密書數十通を得、罪狀明白となり元祿七年十一月光圀の爲に手刃せらる。【九八】

プロムホフ　和蘭人なり。ヅーフが商館長たりし際ヘトル役として在留す。文化中和蘭通詞に英語を授け、また本木庄左衞門等英和對譯辭書の編纂を助け我が國英語研究の嚆矢をなす。文化十一年英船の長崎に來るや、ジャワに至り英總督ラッフルスと會商するところありしが捕へて英國に送らる。文化十四年再び來朝、出島商館長となり、文政九年去る。【二八】

ホ

北條時宗　幕府分解接近時代掲出。【七九】

北條義時　松平定信時代掲出。【八五】

細川幽齋　小字は萬吉、與一郎と稱す。藤孝と名づく。三淵晴貞入道宗薫の子。播磨守元常の養嗣子となる。足利將軍家に仕へ義昭擁立に與つて功あり。後信長に從ひ天正八年三月從四位下侍從となり、丹後に封ぜられ田邊城に治しまた宮津城を築く。信長死後髮を削りて玄旨といひ幽齋と號す。十三年從二位法印に叙す。後秀吉及び家康に從ふ。慶長十五年八月死。年七十七。【二】

細川重賢　吉宗時代、田沼時代、松平定信時代掲出。【一】

本多忠籌　松平定信時代掲出。【八九】

【マ行】

マ

毛利重親　田沼時代掲出。【三八、三九、四〇、四一、四六、五一】

毛利敬親　幼名猷之進。字は子常、誠齋と號す。齊元の子文政二年江戸邸に生る。天保八年四月先代齊廣の後を嗣ぎ封を襲ひ、五月將軍家慶に謁し、六月首

服して將軍諱字を賜ひ今の名に改め、從四位下侍從に叙任し大膳大夫を兼ぬ。銳意藩政を整理し、人材を養成し洋學を奬め又兵制を改革す。嘉永安政の際天下事多くなるに及び藩臣を遣り宮闕を守護せしめしが、文久三年八月其の事を解かれ有志公卿の藩中に來り寓するもの多し。元治元年七月禁門の變を生じ、重臣を蒙り屏居す。慶應三年の冬薩藩二藩と討幕の密盟を結び、遂に維新の大業を成すに至れり。明治四年三月廿八日病みて死す。年五十三、諡して忠正公といふ。野田神社に祀られ、大正四年十一月別格官幣社に列せらる。【六〇、六一、六二、六四、六七、七〇、七二、七六】

齊廣に同じ。【五三】

毛利崇廣

毛利親著

定次郎と稱す。重就の第十四子。齊元の父なり。【五一】

毛利綱廣

幼字千代熊丸、秀就の子。寛永十六年生る。慶安四年二月遺領を嗣ぎ承應二年十二月元服して將軍諱字を賜はり、從四位下侍從となり大膳大夫と改む。天和二年二月致仕し、元祿二年四月死。年五十一。濟高亮安泰嚴院と號す。【四三】

毛利輝元

幼字宰鶴丸、長じて少輔太郎といふ。隆元の子。元就の孫。元龜二年元就の後を嗣ぎて山陰山陽十國を領す。三年右衛門督に任じ、天正二年右馬頭と稱す。十年秀吉と和し、秀吉關白となるに及び從四位下に叙し、十六年四月參議に任じ、文祿四年正月從三位中納言となる。關原役後德川氏に降り、薙髮して宗瑞と號す。寛永

二年四月死。年七十三。【四三】

毛利齊廣

齊熙の子。齊元の養子となる。文化十一年五月生る。初字保三郎、後崇廣と名のり、又今の名に改む。稟性聰明にして幼より學を好み十七歳にして貞觀政要の講義を聽き、太宗の政治を慕ひ熟讀吟味し、十九歳林大學頭の門に入りて其教を受く。天保七年九月齊元の後を襲ひ藩侯となりしが、同年十二月廿九日死。年廿三。著書事斯語、貞觀政要章旨、與人論、儉吝論、述志錄、言志論等數多あり。【五三、六〇、六一、六三、七七】

毛利齊熙

治親の第四子。保三郎と稱す。初名熙成。文化六年兄齊房の後を承け家を嗣ぎ、將軍家齊に謁し偏諱を賜はり今の名に改む。又從四位下大膳大夫侍從に任叙す。文政二年十二月左近衛權少將に進み、尋で民部大輔と改む。文政七年封を齊元に讓り江戸葛飾の第を營みて居り、天保七年五月葛飾の別邸に死す。年五十四。治猶見るべきもの多し。【四七、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五六、五七、六〇、六一、六九】

毛利齊房

治親の子。安永八年生る。初名雄房、義次郎と稱す。寛政三年七月父の遺跡を嗣ぎ、長防三十六萬九千石餘を領し萩城に居る。同七年八月將軍家齊の前に元服し、諱字を賜はり今の名に改む。室は有栖川宮織仁親王の息女。文化六年二月痘を病んで死す。【四六、四七、五〇】

毛利治親

初名德元、また治元、岩之丞と稱す。重就の二男寶暦四年生れ、十年七月嫡子となる。明和五年三月元服し將

軍諱字を賜はりて治元と稱し從四位下壹岐守に任叙す。天明元年十二月侍從に進み、二年八月襲封、九月大膳大夫に改む。寛政三年六月死。年三十八。仁山應壽寧德院と號す。【三八、四〇、四一、四六、四七】

毛利秀元　元就の孫。伊豫守元清の子。輝元の嗣となり、後豐臣秀吉の質となる。天正十八年小田原役に從ひ右京大夫となる。文祿二年輝元に代りて朝鮮に赴き軍を指揮し晋州の役功最も著はる。後歸りて秀吉の養女を娶る。慶長庚子の役西軍に屬し、後家康に降り封を辭し、僅かに豐東豐西豐田の三郡を賜り長府に治す。大坂冬夏の役東軍に從ひ功あり。寛永八年國務を辭し、慶安三年死。年七十二。【四三】

毛利元就　田沼時代揭出。【四三、六四】

毛利慶親　敬親に同じ。【四三】

毛利吉就　幼字元千代丸。綱廣の子。寛文八年生る。天和二年二月襲封、四月元服して將軍諱字を賜はり吉就と稱す。從四位下侍從に叙任し長門守を兼ね。元祿七年二月死、年二十七。大光元榮壽德院と號す。【四三】

毛利吉元　初名元倚、又四郎と稱す。長府藩主毛利綱元の長男。延寶五年生る。元祿四年十二月從五位下右京大夫に叙任し、寶永三年將軍諱字を賜はり吉元と名づけ、從四位下に陞さる。四年十月宗藩吉廣の養子となり十一月遺領を繼ぐ。ついで侍從に任じ民部大夫に改む。性學を好み、享保四年始めて藩校明倫館を建つ。毛利氏の學は實に此時に成る。享保十六年九

月死。年五十五。仰岳淨高泰桓院と號す。【六四】

松平榮翁　島津重豪に同じ。【四】

松平定信　松平定信時代、幕府分解接近時代揭出。【三六、四一、四三、四五、四六、八七、八九、九四】

松平大膳大夫　毛利齊房に同じ。【四五】

松平大膳大夫　毛利齊元に同じ。【五三】

松平宗堯　左近衛權中將頼豐の子。綱條の後を承けて水戸藩主となり、官參議に至る。【八二、八三、八七】

松平宗翰　宗堯の子。正四位下に叙し、左近衛少將に任じ、左衛門督を兼ね。後參議從三位に至る。【八三、八七、一〇三】

松平頼房　家康の第十一子。幼名鶴千代丸。慶長十一年九月四歳の時常陸下妻の地十萬石を賜ひ、十四年正月正五位下左衛門督に叙任し、十二月水戸城に移り二十八萬石を領す。十六年三月元服を加へ、從四位下少將に進み、元和六年參議を經て正四位下左中將に陞り、寛永三年八月從三位權中納言となり、四年正月正三位に移り、寛文元年七月死。年五十九。水戸家の祖なり。【八七】

源頼朝　鎌倉第一代の將軍。義朝の第三子。小字鬼武者。保元の亂十三歳父と共に東國に逃る。途に捕へられ伊豆に流さる。治承四年以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、弟範頼義經を遣して義仲及び平氏を滅し、又奥州を平げ日本總追捕使となり、遂に兵馬の權を握る。正治元年正月死。年五十三。【四】

三宅九十郎
三宅觀瀾　觀瀾に同じ。【八三】

通稱九十郎、名は緝明、字は用晦、觀瀾又端山と號す。京都の人、初め淺見絅齋に學び、後江戸に下り木下順庵の門に入る。天資聰悟、刻苦して書を讀む。其友鵜飼金平の薦を以て水戸義公に仕へ、二百石を賜はる。時に年二十六。後累遷して總裁となる。正德二年新井白石の薦を以て室鳩巢と同じく擢でられて幕府の博士となる。時に年三十八。是歲朝鮮來聘使に應接す。享保三年八月病みて死す。年四十五。駒込龍光寺に葬る。【八五】

ム

向井源五左衞門　名は友章、字は達夫、賀山山人、また滄浪と號す。通稱は源五左衞門、幼より學を好み、儒書を時の名爵市

來春伯に受け、年十八にして江戸昌平學舍に入り、居ること七年文材衆に超へ尤詩を善くし、諸體多くは備はると云。藩主齊宣の命により、絶句及律詩數首を呈し褒言を受く。文化九年死す。年五十四。【一五】

村田四郎左衞門
村田清風　清風と同じ。【四八、四九、五〇、五八、六一、六二、七二、七五】

通稱四郎左衞門、後織部と改む。松齋と號す。人となり剛毅俊爽、其學定主する所なし。經世を以て志となす。齊房より敬親に至る四君に歷仕し、毎に要路にあり、大に長藩の文武の政を整ふ。然れども往々にして人の怨を受くることあり、或は刺客に襲はれ、或は暴客に門檻を斫り石缸を碎かれたることあり。清風甚だ以て憂となさず　晩年三隅の舊居に文武

講習所を設け子弟を教授す。德川幕府召出して用ひんとせしが病に罹りて歿す。【六二、六三、六八、六九、七二、七四、七八、七九】

【ヤ行】

ヤ

屋代弘賢　松平定信時代揭出。【八九】

柳澤吉保　柳澤保明に同じ。幕府分解接近時代揭出。【九八】

山縣孝孺　周南に同じ。【四三】

山縣周南　名は孝孺、字は次公、少助と稱す。周南は其の號なり。周防の人、代々毛利氏に仕ふ。周南年甫めて十九、父良齋に從つて江戸に出で荻生徂徠の門に入る。拮据勉勵、同門の士安藤東野と併稱せらる。居ること三年學成りて鄉に歸り、正德元年朝鮮使

節に應接して其學才を知られ名聲大に擧り常に侯側に侍せしめらる。元文二年明倫館祭酒小倉尙齋に代りて祭酒となり、益々學校を振起し門下に知名の士を出すこと多し。寶曆二年八月死。年六十六。著書數種あり。【四三】

山縣長伯　字は子成、良齋と號す。毛利氏に仕へて儒官となる。周南の父なり。【四三】

山縣半七　周南の後なり。名は禎、字は文祥。明倫館學頭又祭酒たること數十年嘉永五年致仕す。嘗て命を奉じて重建明倫館記を屬す。著書國史纂論、芸窓筆記、禮記備考、儀禮備考、周官備考、中庸文脈、臣軌解等數種あり。【六〇】

山田原欽　名は熙字は舜愈、また原欽、復軒と

山田亦介　號す。長州萩の人。幼にして頴悟、學を好んで伊藤坦庵に從ひ、また字都宮遯庵に學ぶ。資性强記博識一藩中に推さる。元祿六年死。年廿八。【四三】

毛利氏の臣なり。名は公章愛山また含章齋と號す。兵學に精しく一藩に推さる。天保七年藩主の近侍に擧げられ、安政五年造船鑄砲の事を掌る。九月兵庫海警衞を命ぜらる。六年軍政改革の命を受けて之に與る。尋で益田伊豆の輔導となり、外鑑に關する樞務に參與す。元治元年七月禁門の變以來俗論派の爲に誣られて國難を釀すの罪により親族の家に幽閉せらる。十二月十九日同志六人と共に野山の獄に斬らる。年五十六。明治二十四年功を以て正四位を贈らる。

山本正誼　【七五】幕府分解接近時代掲出。【五、七、八、一〇、一一、一二、一四】

ヨ

依田處安　讃岐の人、字は徐卿、喜左衞門と稱し竹雲と號す。始め林鳳岡に昌平學に學び、書を能くするを以て名あり享保元年薦められて水戸藩に仕へて史館總裁となり二百石を食む。延享元年十二月廿八日死。年六十五。【八三、八四】

【ラ行】

ラ

賴山陽　松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【七八】

リ

林子平　田沼時代、松平定信時代、幕府分解接近時代掲出。【七九】

【ワ行】

ワ

和智東郊　名は棣卿、字は子學、山縣周南に學びて其高足たり。夙に詩文を以て頭角を現はす。萩生徂徠も其學を賞して海内の奇才と稱せりといふ。明和二年死。年六十三。著書文集、東郊座右記、虚實見聞記等あり。【四三】

索引

【ア行】

ア

あいなの浦……二七〇
赤濱村……四二八
赤間關……二〇二、二〇四、二三一
安藝……二九九
阿久根……一七二、一八一、二二一
朝倉……二六六
厚狹郡……二四三
會津……七
油島……一一、一四
油島千本松……一一、一四
天草……一八
阿武郡……二〇二、二〇四、二四〇、二三三
アムステルダム……一一七、一一九
安八郡……一一

イ

イギリス……二六一
伊勢海……一一
伊勢金廻輪中……一三
伊勢田代輪中……一三
礒茶屋……四二、四四
出水……四四、八二、一八〇、一八一
出雲……二七二
岩國……二二三
揖斐川……一一、一四
揖宿……一八一
今和泉……七二
今浦……一八六

ウ

宇治萬福寺……一七九

エ、ヱ

江崎……二〇三、二〇四
越後……七
江戸……八、二四、二一、七八、七九、八一、八二、八四、八五、八六、九〇、九二、一〇二、一〇五、一〇八、一二八、一三二、一三三、一三三、一三三、一四二、一四五、一四八、一五〇、一六一、一六三、一六七、一六八、一六九、一八一、一九一、二〇九、二二三、二三一、二九七、二九八、二九九、三一三、三二七、三三八、三三九、三四〇、三四三、三五〇、三五九、三六四、三七八、三八二、三八八、三九四、四〇〇、四〇二、四三二、四九九
江戸麻布邸……二四八
江戸灣……三四〇

オ、ヲ

岡山……一八
隱岐……二七七
沖永良部島……一六五
小部……一八六、二六六、二七二
小畑濱……三六六
尾張梶島村……一三
尾張神明輪中……一三
大口……四四
大阪……五、五六、一〇五、一三八、一四二、一四五、一四八、一六一、一六七、一六八、一七二、一八〇、一八四、一八八、二一九、二六九
大崎村……二七
大島（薩摩）……一六四
大島（長門）……二〇四
大島郡……二七一、二七二
大島郡久賀……一八六
大田邊前……二七一
大津……二七一
大津郡……二七一
大津郡向津具……二〇三、二〇四
大馬場……三七三
大濱……一八六、二六五
大森……三五、二三六
大井口……三七二

【カ行】

カ

海西郡前ケ須……二一
加賀……六
鹿兒島……六、一八、二五、三八、四一、七八、八〇、八一、八八、九〇、九三、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇四、一六一、一六八、一七一、一八一
加世田……一八一
片浦……一七三
加治木……七七
葛飾邸……二四四、二七七、二八一
甲突川……一八〇
鎌倉……八、一七九、四二九
上關……三二八
上關麻郷……一八六
亀作村……四九九
通浦……二〇四

キ

喜界島……一六四
菊ケ濱……二四一、二六六、三七三
紀州……五、四九六、五〇二
岸和田……三
木曾川……二一、二四
木曾川（薩摩）……一八〇
京……一四二、一六八
京都……五、八、二六、一三〇、一三〇、一六一、一七九、一八一、二四〇、二四〇二
木屋下濱手……三七三

ク

久志……一八一
熊毛淺江……一八六
倉江……二四〇
藏元下……三七三
黒川口……三七三
黒川村……三六三
荒神山……三七三

ケ

京師……二〇八、二〇九、二四一六

コ

小石川藩邸……五〇一
弘法寺……三七三
高野山……一七九
國府……一八〇
小林川……一八〇
駒籠……四一九
米の津……八一、九〇
小鼓村……一一

【サ行】

サ

櫻田……一七九、二三四、二五九、二九四
佐多……一七二
薩摩……一〇一、一七二
佐波郡……二四三
鯖山……二六六
鯖山峠……二六六
澤江……三七八
三所峠……二四七

シ

重富……七七
七島洋……一七二
品川……一六七
芝……一四二、一七七、一七九
芝邸……二八、一六七
四本松……三七三
下市七軒町（水戸）……四四三
下關……一八六、二四〇、二三二、三二八
下津……一八六
白金……一四二、一六七
新橋邸……二四四

ス

瑞典……一一七
巣鴨郷……一四〇

須佐……二〇三

セ

關ヶ原……二
瀬戸内……二〇五
瀬戸崎……二七一
瀬戸崎浦……二〇四
泉州堺……一六一
川内……一八一

【タ行】

タ

大道……二六六
道祖神峠……三七四
道祖神山……三七三
多賀郡……四二八
高輪……二六、二八、一四二、一四八、一六七、一七七、一七九、二四四
高松……三八七
種子が島……一七三
田町……一六九、一七九
垂水……七七

チ

筑前……二〇八
千代田城……二二八

ツ

津輕……三
都野郡下松……一八六
都濃郡福川……二六五
妻崎開作……二四三

テ

出島……二九、二三四
天樹院……三七三
天滿大融寺……一六三

ト

總地……二六七

熊の島……一六四
熊丸原……三五
熊山……二一一
豊坊……一八一
豊浦郡……一〇三、一〇四

【ナ行】

ナ

中熊毛光井……一六六
長崎……二一、二二、二四、二五、二六、二八、一一、一八、一一九、一二二、一二〇、一二一、一八〇、二五九
長崎出島……一一一
中津……一三〇、一三五、一三八
中の島……一八五
中の關……一八六、一六五、一七〇
中關宇津路木……一八六
長良川……一四
中尾村……一七二
長尾山……一七四

ニ

西の浦……一三三
西の宮……一五五
西向……一九九
日州赤江……一八
丹羽郡……一一
仁保市……一六六

ネ

根占……一九三

【ハ行】

ハ

伯耆……一七七
羽賀臺……一五八、一六〇、一六二、一六四、一六五、一六六、一六七、一六九
破幹の盛……一六六
萩……六、一七、一三〇、一四八、一五一、一九八
萩城……一五九、一七八、一六六、一九七、一〇一、一二二

深川……二〇〇
福知山……一二一、一二八、一三一
伏見……一五一、一八一
蓋井島……一〇六、一〇四
船木後湯……一六六
船木……一四一、一六七、一七一、一六〇

く

北京……一二二

ホ

坊津……一九二
防府……一六六
堀端……一九九

【マ行】

マ

松原山……一一〇
松前……一九

ヤ

ヤヴィ……一一七、一一九、一二一、一二五、一二八
八幡方……一五二、一六二、一六三、一六八
八丁土手……一六六
花岡……一七七
演地藏……一二
波見……一九二、一八一
巴理……一一九

ヒ

日向……一七
氷上郡細河……一六六
肥後……一五
尾州……四六、一〇三
備中……一二七
肥中……一〇三、一〇四
日奈久……一九
平野村……一二三
備後……一二七

前賣……四三

ミ

三隅……三六、三八
三田尻……一九、二〇、二一、二四、二六
三田尻川口……一八
水ケ窪……三四
水戸……三六、三七、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三
水戸梅戸……四〇
南向……一九
南向堀鴻……一七
南門……三四
美濃郡……二七、二八、三一
美濃桑原輪中……三
美濃蟹股輪中……三
美濃本阿彌輪中……三
宮市……二五
都の城……七
宮の城……七

ム

向津具……二〇、二一、二四
六連島……二四
室積……一六、二六

モ

物見ケ嶽……三七

【ヤ行】

ヤ

屋久島……一七
矢地……二五
柳川……三
柳井……一八
矢原……二六
山川……一七
山口……二五、二六、二七
山口小鯖……二五、二六

山口三宮……二六
山崎河リ……一五
山代……三二

ヨ

吉田……一八、二六、二七、二八
吉野川……二四
淀川……一五
米澤……三

【ラ行】

リ

琉球……二二、一五、一六、一七、一八

【ワ行】

ワ

鷲酒西……二六
六本松……二六

王子……八
鵜浦……一五

昭和二年十一月二十日印刷
昭和二年十一月二十三日發行

不許複製

近世日本國民史 雄藩篇 並製奥附
定價 金貳圓五拾錢

著者 東京市京橋區日吉町 德富猪一郎

發行兼印刷者 東京市京橋區日吉町 渡邊爲藏

印刷所 東京市京橋區日吉町 民友社

發行所 民友社
振替口座東京一三一〇〇

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
振替東京一三一〇〇

蘇峰　德富猪一郎著

近世日本國民史

特色本領の一二

◆歷史講究熱勃興　自國を知れ、國史に返れとは蘇峰先生の警語だ。當今の社會に歷史講究熱が、蓊然として興つて來たのは、邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、與つて大に屬るとは、朝野識者が萬口一聲の批判である。

◆獨闘創造の歷史　近世日本國民史は、其の材料の精確詳審であるのみならず、成る可く前人の功を沒せざる爲めに其の中實を採用するのみならず、其の歷史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてゐる。併し若し國民史が、單に古書の拔書と思ふものあらば、それは大なる見當違ひだ。國民史は著者の獨闘であり、創造である。

◆胸中の一大樓閣　著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。而してこの大建築は、實に大正の御代が象徵す可き一大偉觀であるのみならず、帝國文獻の有する曠古の一大產物である。

◆特色は綜合大觀　一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂る歷史と同一視するは、大なる間違だ。歷史は歷史だが、從來の歷史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。眞に血の通つた活きた歷史だ。

◆時代潮流の活描　それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、一方に肉を見。一方に思想を見、一方に生活を見。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に從て動く情態を描き且つ叙し、且つ論ずるからである。これ從來の史書に見る能はざる特徵の一だ。

◆秩序的百科字彙　されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、經濟でも、文學でも、宗教でも、美術でも、哲學でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

近世日本國民史

織田氏時代 前篇	本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、義の衰亡に止めてある。是れ眞に信長の勃興より、覇率創始時代の記錄である。	
織田氏時代 中篇	本篇は信長が、名實共に時代の主人公となり、鋭意努力の時代を叙述したるもので、長篠戰爭を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。	
織田氏時代 後篇	本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に經世的英雄たる信長の全體を顯現したるものである。	
豐臣氏時代 甲篇	本篇は秀吉の素生と、其の出身に筆を起し、然る後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳と謂ふべきもの。	
豐臣氏時代 乙篇	本篇は秀吉が五十一歲から、五十三歲に至る最も油の乘りたる期間の記錄で、彼が日本統一の事業を完成の域に進めた秀吉の生涯中最得意の時代である。	
豐臣氏時代 丙篇	本篇は秀吉の國內的政務の落著を示すもので、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りの如き、奇觀として注目に値する。	

上製　菊判　定價　各五圓　送料　各十八錢
並製　四六判　定價　各三圓　送料　各十二錢

近世日本國民史

豐臣氏時代丁篇 **朝鮮役** 上卷

本篇は前人未見の史料に據り、著者の最も精力を傾注したる一で、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壤入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。

豐臣氏時代戊篇 **朝鮮役** 中卷

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史とも謂ふべきもので、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封ずるに終り、日明兩軍の遭遇戰あり。

豐臣氏時代己篇 **朝鮮役** 下卷

本篇は朝鮮役の總勘定とも謂ふべきもので、講和評定の經緯より其の實行期に入り、秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

豐臣氏時代庚篇 **桃山時代概觀**

本篇は日本歴史に、磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に亙る特色を選び、其の概觀を描く。

家康時代上卷 **關原役**

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戰に於て石田三成が家康と雌雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙すると共に其の前後の顚末を記述す。

家康時代中卷 **大阪役**

本篇は天下の名實德川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陷り豐臣氏全く亡ぶるの狀を叙したもので、眞に沙翁の史悲劇以上の史的興味ある讀物。

上製並製　菊判四六判　定價各五圓・各三圓　送料各十錢・各二十錢

近世日本國民史

家康時代下卷 **家康時代概觀**

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精密に叙述したもので、德川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。眞に是れ完全な家康論。

德川幕府上期上卷 **鎖國篇**

本篇は鎖國政策に關聯した內外一切の出來事を、豐富なる材料と精嚴なる史筆とに因りて、論斷し叙述したもので、島原役の顚末等をも記述す。

德川幕府上期中卷 **統制篇**

本篇の眼目は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顚末の如き、最も幕府の醜惡を抉出し、一面幕政人材史を作す。

德川幕府上期下卷 **思想篇**

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述したもので、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪の叛逆の顚末をも精細に叙述す。

元祿時代上卷 **政治篇**

本篇は幕府が絶對威力を、如何に政治方面に實現したかを記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

元祿時代中卷 **義士篇**

本篇は赤穗義擧事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し、獨特の觀察の下に成る眞の義士觀である。

上製並製　菊判四六判　定價各五圓・各三圓　送料各十錢・各二十錢

近世日本國民史

元祿時代下卷 **世相篇**

本篇は元祿時代に生める各方面の代表的人物と、其の業蹟を記述したもので、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を列擧す。

上菊並四
製判製六
定送定送
價料價料
各各各各
五十
八三
二十
圓錢圓錢

元祿享保中間時代

本篇は徳川幕府に取つて、將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱横に叙述し、居然小家康たる吉宗の人物は勿論、更に文教發達の方面をも特筆した。

上菊並四
製判
製六
定送
價料
各
五十圓
八五十
二錢錢

吉宗時代

本篇は家宣、家繼の短期時代に於て、新井白石が如何に活政治を運用したかを精叙すると共に、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等を特筆大書して概觀に及ぶ。

上菊並四
製判製六
定送定送
價料價料
各各各各
五十
八三
二十
圓錢圓錢

寶曆明和篇

本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹内式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、國典研究が自から幕府倒壞の因を釀生したるを徵象す。

上菊並四
製判
製六
定送
價料
各
五十圓
八五十
二錢錢

田沼時代

本篇は徳川幕府の謎の時と云はれる田沼時代に向つて嚴正なる批判を下したるものであつて、田沼意次の人物を詳細に解剖し、蘭學興隆の物語り、上杉鷹山の劇的場面に及ぶ。

上菊並四
製判製六
定送定送
價料價料
各各各各
五十
八三
二十
圓錢圓錢

松平定信時代

本篇は徳川家齊時代に於ける幕府の危機より筆をおこし、時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。

日本國民史 **近世史**

幕府分解接近時代

本書は徳川十一代將軍家齊時代、即ち人物と金との拂底のため自から幕府の崩壞する勢を解き、外國船の接近に國防論尊王攘夷論の湧出を述べる。

（上製）價 五、〇〇
送 一、一八
（並製）價 二、五〇
送 一、一二

雄藩篇

十一月中旬發行

蘇峰 徳富猪一郎

西郷南洲先生

斯書が刊行せらるゝや天下の大歡迎は期せずして注がれ、忽ち十七版を突破し、尚陸續として註文殺到す。以て本書の眞價を知るべきである。

四六判
價 一、六〇
送 一、〇四

大久保甲東先生

本書は維新の俊傑甲東先生に對する世人の誤解を一掃し、先生の眞の力量、手腕、人物及びその事業とを評論す。實にその筆致明鏡の如し。

四六版 五百餘頁
價 二、〇〇
送 一、一二

財團法人 青山會館編纂

南洲先生遺墨集

一卷を開かば天涯の大人豪の風丰躍如として咫尺の間に拜し無限の大教訓を拜受し得べく現下の我國情に鑑み厚敬興德の源泉である。

百三十點
價 拾五、〇〇
送 一、〇〇

甲東先生遺墨集

本集は南洲先生遺墨集と共に日月の如く井び懸けて靑史を照破し、四海忠義の心を振起するの一大寶訓なるを疑はず、恭しく天下有志の士に薦む。

百六十點
價 拾五、〇〇
送 一、〇〇

蘇峰 德富猪一郎 著

國民小訓 天覽台覽 久邇大宮殿下より本書嘉稱の玉詠漢詩御下賜 附錄 涵情養氣集

忠君愛國の護符、憲政教義の絶好讀本、眞に國民醒覺の教訓書。附錄に和歌八十首、漢詩九十絶を收む。孰れも國民の志氣を振作するの隨一資糧。日夕諷誦の絶好伴侶。（文部省認定）

菊判並製 二四〇頁 奉仕的廉價 ㊀八〇 送一〇八

縮刷國民小訓

「國民小訓」愛讀者諸氏の熱誠なる御要求に應じ、携提に便にして而かも醇酒なる縮刷版。

四六判 ㊀五〇 送一〇六

家庭小訓 改訂（文部省認定）

家庭の實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。

菊判並製 ㊀五〇 送一〇六

處世小訓 改訂（文部省認定）

如何にして世に處すべきかを平易に說いたもので、實に出世の好指針。

菊判並製 ㊀五〇 送一〇六

昭和一新論

本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代劈頭に著はされし物。過現未を達觀しよく字内の趨勢を洞察しての立言なり。

菊判 ㊀六〇 送一〇八

民友社編輯部編纂

國民小訓字解
家庭小訓字解
處世小訓字解

何れも出來るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。

價 ㊀三〇 送一〇四

價 ㊀二五 送一〇二

價 ㊀二五 送一〇二

蘇峰 德富猪一郎 著

大正の青年と帝國の前途

日本帝國の使命遂行と、國民の覺悟とに就て、大正の青年の精神元氣を、鼓舞作興した國運興隆の指針盤。

三六判上製 ㊀二〇 送一二

時務一家言 改版

蘇峰先生の思想經綸の大經大綱を說示した書で、其生命を打込み、熱血を注ぎたる述作言論の精粹。

四六判上製 ㊀二〇 送一八

大和民族の醒覺

日米問題に關して、蘇峰先生が幾多の醒覺を力說された警告書で、同胞諸君の自奮を促がす必讀書。

四六判上製 ㊀二〇 送一一〇

三十七八年役と外交

日本國民の血を沸かした、三十七八年役の外交機密を、當時議に參與した著者が公平に批判し、赤裸に暴露した世界的奇書。

四六判上製 ㊀一〇 送一〇八

精神の復興 蘇峰文抜萃

如何にして國民的精神を興隆し、實力を養成すべきかを啓示した、愛國的熱誠の溢れたる精神復興の指針。

四六判並製 ㊀二〇 送一一二

政界の革新

清浦内閣を中心として一世を震駭したもので政界の革新を絶叫した活文字。

菊判 ㊀五〇 送一二〇

吉田松陰 改版

維新改革時代の代表的人物たる松陰の眞傳として、唯一なる獨特の權威を有す。青年諸君の一讀を待つ。

四六判上製 寫眞筆跡入 ㊀二〇 送一二〇

靜思餘錄 改版

蘇峰先生の廿五歲より卅二歲に至る時代の精神的結晶品で、最も用筆の觀致に饒み感興不盡の名著。

三六判上製 ㊀二〇 送一〇八

烟霞勝遊記 還曆記念出版 上卷 下卷（品切）

蘇峰先生の興味饒き勝遊の產、多彩なる名勝記、又駒底沸出の印象記で、足跡北海道より滿鮮に連る。感興不盡、紀行文の隨一、旅行の好伴侶。

風景人物寫眞二百余人 ㊀三、五〇 送一二〇

蘇峰　德富猪一郎

蘇峰隨筆
先生の學問、識見、趣味、修養、好尚、即ち全人格が最も鮮明に發揮せられたもの。自然、人事、群籟、思索の隨感隨錄、風趣橫溢。
四六判上製　價四五〇頁　送二、五〇〇

第二蘇峰隨筆
概れ震災後の起稿で、從つて記述眞摯味多く、讀者の感興を惹くこと深し。其の執れにも先生獨特の觀察識見あり。隨筆の絕好。
四六判上製　價四四〇頁　送二、五〇〇

第一人物隨錄
獨特の眼孔能く致を以て、東西古今の人物を捉へ來りて、能く其の眞を傳ふ。著者が『書くことを禁じ得ざる刹那に於て書いた』ところに本書の眞價がある。
四六判上製　價四四〇頁　送二、五〇〇

猪一郎

野史亭獨語
本書は蘇峰先生が湘南逗子の野史亭に於て、修史の餘課產み出したる隨感隨筆六十四題を收む。其の題目內容の豐富なる、記述の精明淨潔なる、讀者叩くに從ひて、大小の響之れに應ずるの妙がある。
四六判上製　價四四〇頁　送二、〇〇〇

賴山陽

賴山陽書翰集（上下）
德富猪一郎、木崎愛吉、光吉元次郎　共編
賴山陽は著者幼少の頃から、愛好傾倒した人物の一だ。本書は三十余年の間博搜した資料と研究した識見とを以て、大觀した力作。山陽の全面目躍如。大家より大觀した賴山陽書翰の一部を、嚴密なる考證の下に、年代順に分類編纂したるもの。自ら山陽自叙傳を大成した空前の產物。
四六判上製　價一八〇〇頁　送一八、〇〇〇　五四

西半球を巡りて
故櫻痴居士　顧地源一郎　蘇峰學人序
井上雅二　蘇峰學人序
本書は弘く江湖の所藏を探求して得たるもの、嚴密なる考證の下に、年代順に分類編纂したるもの。自ら山陽自叙傳を大成した空前の產物。
菊判上製　價一八〇〇頁　送一八、〇〇〇　五四

改版　幕府衰亡論
本書は幕府衰亡の因由、歸結を詳論して、必傳の價値ある名著。觀察正鵠、意見公正、論斷穩當、而して平明、淡泊、然も情と理と勢とを揣摩して要領を得たるところ無比。
著者は世界を家として、足跡渾球に普し。本書は南北中米十二ケ國、三萬七千餘哩の視察歷遊の記。山川風物を活寫し、海外發展國策の經綸を絕說する快著。
四六判並製　價一、五〇〇　送一〇〇
菊判地圖寫眞十數葉入　價三、五〇〇　送一八〇

德富蘆花　健次郎

改版　自然と人生
萬人の胸に徹する魅力ある本書は、實に現今に至るまで、其の需要は出版界の記錄を破る。精彩ある自然と人生のスケッチを見よ。
菊半截並製　價六〇　送四

改版小說　不如歸
讀書界の視聽を集めた本書は、津々浦々にまで知られた武男と、浪子を中心とした悲愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽の名篇。
四六判美本　價一、〇〇　送八

改版小說　思出の記
著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの運命の曲折と、生存の惱みと、戀愛の歡喜と、結婚の幸福を描いた長編小說。
三六判美本布裝　價二、〇〇　送八

改版　名婦鑑
本書を一度繙けば世界古今の名婦を一堂に集めて相語るの思ひがある。古の名婦の跡をたづね現今の名婦の事業と人物を知るは女性そのものゝ眞價を知ることである。
四六判並製　價一、〇〇　送六

農村問題四名著

農學博士　小野武夫　村の辻を往く
本書は各方面より見たる農村生活の改善等を實際の例を擧げて、極めて面白く平易に論述したる近來の快著。
四六判並製　價六〇　送四

農學博士　中島九郎　述　現時の農村問題
米國問題、小作爭議、農村生活の改善等、其他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上多くの問題を實際より研究した良書。
四六判並製　價六〇　送四

フォート博士原著　水野常吉譯　丁抹の農村と其の教育
世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育とを說ける農村問題解決の鍵にして、國富增進の典型を明示したる利用厚生の好指針。
四六判美本　價二、〇〇　送八

フォート博士　述　農村問題講演
斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝の際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與へられたる農村及び教育問題の講演集。
四六判並製　價八〇　送六

正岡子規　監修　新俳句
明治類題の句集で、題目の豐富、句數の多饒なることを特色とせる斯界の眞書。子規居士の監修に高き識見を覗ふべし。
四六判美本　價一、〇〇　送八

國民教育奬勵會編

現代文化と教育
故厨川博士、深田博士、阿部帝大教授、菅原博士、上野帝大講師、澤柳博士、入澤帝大教授等の文化教育の講演集にして、絶好の必讀書。
四六判 一、六〇 送五〇

師範大學講座第一輯 **修身科**
本會新設講座の第一回講演筆記である。理論と實際の兩方面から說いた修身科の研究。教育者諸君補習用の絶好書。
菊判 二、三八頁 送八〇

師範大學講座第二輯 **宗教科**
神教、佛教、基督教、儒教即ち世界四大宗教の眞髓を四大家が最も短的、而かも平易に叙したるもの。今まで求めて得られざりし書。
菊判 三〇〇頁 一、〇〇 送八〇

文學博士 澤柳政太郎編 **現代教育の警鐘**
本書は我國唯一の實際教育の研究學校たる所の成城小學校の苦心經營と十ケ年努力とを披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘である。
菊 一、八〇 送一二

英 バイウォーター原著 服部敏一譯述 日米關係未來記 **太平洋戰爭**
日米將來の謎を解き、且つ語る稀有の快書にして、日米の將來を知らんと欲するものは是非一讀あれ。
四六 一、六〇 送一、六〇

國民新聞編輯局編 對米問題研究 **重大なる結果**
諸名士の講演筆記を基として、金子子爵の長論文を加へた、對米問題の研究書。
四六判 一、六〇 送一、五〇

同政治部編 **普通選擧早わかり**
普通の內容を平易に、親切に解說したもので參考資料をも收めた類書中の覇王。
小形 美本 三〇 送二〇

下位春吉述 **ファッショ運動**
伊太利國民運動に參加した著者の講演筆記で愛國運動振りが如何に躍如たるかを見よ。
菊 半截 五〇 送四〇

鶴友會編 齋藤實傳 **大倉鶴彥翁**
實業界の大立物として、一世の快男兒たる翁が、裸一貫から今日の大成功をした絶好の立志篇。
菊判 上製 天金 美本 三、五〇 送三、八〇

駒澤裁縫學院長 坂井光子 **家庭向物尺型紙裁縫**（小供婦人服の卷）
一讀すれば直ぐ小供服婦人服が誰れにでも出來る重寶な書
菊判 美本 二、五〇 送一二

大谷光瑞師著

新刊 **無題錄**
第一編、第二編、第三編
第一、第二編 各 八〇 送 八五
第三編 各 一、〇二

極樂莊嚴
新鸞上人の胸中燦たる光明に滿つ極樂の莊嚴を科學的に表現したるものは即ち本書である。宗教と科學とに逃ふ世人の救ひの光明である。
四六判 二、〇〇 送 二、〇八

濯足堂漫筆
師一流の獨特の紀行感想隨筆等を收むること世有餘篇、何れも多彩豐潤、津々たる興味盡きぜぬ新集を見よ。
四六判 二、〇〇 送 二、〇〇

孫子新註
孫子の本領は外交經世の眞髓を說くにある。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。本書は蓋し人生の好指針である。
三六版 一、〇〇 送 一、〇六

佛說阿彌陀經講話
西方淨土の本願は正に此の經典より流出してゐる。本書は光瑞貌下の詳釋本にして、その博學と懇切とは正に賢師慈父の感あり。
四六判 一、〇〇 送 一、〇六

般若心經講話
光瑞師の多年の研究に依て成れる書。其の該博の蘊蓄を傾倒した後完成されたものだけに、渾然之を融一してゐる。
四六判 一、七五 送 一、〇四

佛教の原理
本書は師が博大なる科學的智識を傾倒し佛教の原理を解釋闡明したもので、一讀以て百疑氷解、直ちに其の深奥微妙の眞理に到達する著者苦心の名著である。
四六判 一、五〇 送 一、〇六

光瑞師著	**第一義諦**	本書は光瑞親下の著書中に於て最も光彩陸離たるものにして、玄關を極めたる佛教の眞諦を說く獅子吼である。必讀の書なり。	四六判 價一、二〇 送〇、〇六
	見眞大師	約七百年前に他力眞宗の本願を體現されたのは實に見眞大師である。本書は大師の裔孫たる光瑞師が大師の信仰と人格とを詳述されたものにして、大師の面目躍如たるものがある。	菊判和裝 價三、〇〇 送〇、一二
國民新聞政治部編	**普選ポスターと新戰術**	現代はポスターの時代である。ポスターは直接簡明に大衆に訴へる。正にこれは普選唯一の武器だ！本書は各國各政黨のポスターと普選常識とを傳ふ。	四六判 價〇、四〇 送〇、〇六
國民新聞編輯局編	**地方普選早わかり** ——府縣會議員選擧の心得——	本書は府縣會議員普選の常識、及びそれに必要なる法文を載せたるもの。「普選ポスターと新戰術」の姉妹篇なり。	四六判 價〇、三〇 送〇、〇四
伊藤龜雄著	**歐洲の獨裁政治**	本書は大戰後に於ける歐洲諸國が如何に獨裁政治に傾いてゐるかを論述したるもの。	四六判 價〇、二〇 送〇、〇四
井口一郎著	**我國の無產政黨**	本書は近來我國に現はれ、殊に普選後は興味の中心ともなるべき無產政黨の生立ちを述べしもの、近代人必讀の書なり。	四六判 價〇、二〇 送〇、〇四
昭和三年版	**國民年鑑**	日本に於ける年鑑の元祖は實に本國民年鑑である。古き基礎と新しき材料とに依つてなる社會家歷寶鑑なり。	品切

G

384
43

終